



秘めたる蕾、

啄むモノは...

秘めたる蕾、啄むモノは……。

熟れたままの果実 体験版

〓登場人物〓

中村 昭利 .. 鬼瓦校に通っている。三組。

中村 恵美 .. 昭利の母。

坂田 広樹 .. 鬼瓦校に通っている。三組。昭利のクラスメート。

笠原 雄太 .. 鬼瓦校に通っている。三組。昭利のクラスメート。

沢森 明日香 .. 鬼瓦校に通っている。三組。昭利のクラスメート。

志垣 隆 .. 鬼瓦校の職員。三組の担任。

〓用語〓

鬼瓦村 .. 物語の舞台となる山間の村。農業、染業が盛ん。イチジク、ライチ、ザクロなどの果実が特産品。

鬼瓦神社 .. 鬼瓦村にある神社。夏と秋に神社が行われる。

三軒寺 .. 鬼瓦村にある寺。春と冬に行事がある。

公民館 .. 鬼瓦村の公民館。行事などの準備、会議などを行う寄り合い場所。

鬼瓦校 .. 鬼瓦村にある学校。老朽化しており、新校舎、新体育館が作られた。

1. 日常

「じゃあ、お昼ごはん食べたら俺んち集合な」

金曜日の講義が終わると、中村昭利は仲の良い級友に告げた。今週の水曜に発売したゲームソフトを一緒に遊ぶつもりだった。

「ああ、いいよ」

坂田弘樹は頷き、鞆を背負う。

「ちょっと昭利、ゴミ捨てに行くの手伝ってよ」

講義室を出ようとしたところで同じクラスの女子、沢森明日香に呼び止められた。

「げ、明日香……」

昭利は舌打ちしながら振り返ると、明日香が腕組みして睨んでいる。

ボーイッシュな雰囲気のある彼女は、昭利にたいしてずけずけモノを言うタイプ。

生意気なだけかといえどそうでもなく、勉強ができて提出物期限もしっかり守る優等生的存在。掃除をさぼる男に厳しく、一方で困っている人に手を差し伸べる性格だ。

今もゴミ箱を抱えている人が重くて困っているのを見て、手を貸そうとしていた。

「俺、当番じゃないんだけど……」

「なにか言ったかしら？」

強気な性格が見て取れるつり気味の瞳と、整った鼻。健康的な肌色は日焼け止めのおかげで白さが残る。柔らかそうな頬は感情に左右されて膨れたり真っ赤になったり忙しい。

最近になって髪を肩にかかる程度に伸ばしていて、ポニーテールにしたりツイントールにしたりころころ変わる。本人曰く、最近見た映画で三つ編みのヒロインが髪を下ろすシーンを
つ。を見て影響を受けたらしい。

最近はずっと女らしくなったけれどこれまでのボーイッシュな雰囲気があり、男勝りな態度のせいか、あまりセクシーな印象をもたれにくく、クラスの女人気カーズトではいまひとつ。

「とにかく行ってきてよね。あたし、それまでにこっちの掃除終わらせておくから」

「なんだよ、俺ら当番じゃねーのに……」

昭利はゴミ捨てを押し付けられそうになったので、ぶーぶー文句をこぼす。

「いいでしょ、捨てに行くぐらい。どうせ帰り道じゃない」

明日香も負けじと胸を張る。去年までは小さかったけれど、最近は体操着姿の時など、そのふくらみが目立ち始めている。本人もそれを気にしているらしく、だぶだぶなダサイ服を着ることが多くなった。

「またゴミ箱持って戻らないとダメじゃないか……」

「ははは、中村君と沢森さんは仲がいいね」

そんな二人のやり取りを遠目に見ていた教員の志垣隆は、笑いながら言った。

「な、誰がこんな奴と！ 先生、変なこと言わないでください！」

「俺だつてごめんだ。こんなブス！」

「あー！ 言ったな！ 誰がブスよ！」

「へーんだ、ぶーす！」

「ここら、中村君、女性にそんなこと言っちゃいけないぞ？ 沢森さんだつて魅力があるよ。そういう友達が居る中村君、先生はうらやましいなくなつてな」

隆は下がってきた眼鏡を戻し、笑顔で言う。

大学を出て二年の教職浪人を経て、ここ鬼瓦校へ赴任したのが三年前。浪人時代は恋人が居たと自称していたけれど、独身男性らしいよれよれのワイシャツと同じ色ばかりのスーツ姿を見る限り冴えない人という印象が強い。

教員の中では若手であり、よく雑用を頼まれている。そのせいで腰が低いという印象が定着しており、生意気な学生達からはそのことで舐められていた。

「さすが先生、わかっている！ ま、昭利みたいなおこちゃまにはわからないでしょうけど

」

「へん！ 先生は口が上手いもんな。明日香みたいなリス女のどこがいいんだよ」

「？ どこがリス」

「ん？ だから、この前、お前リスの尻尾みたいな髪型してたじゃん」

唐突な悪口に明日香は首をかしげて聞き返すと、昭利はたじろぎ、視線を天井に向ける。

「ああ、うん。そうだったね。覚えてたんだ。やっぱり変だった？」

「……ええと」

言い合いの最中だというのににこりと笑う明日香にたじろぐ昭利。いつもの調子だったら「変！」と言いつつ返して「なによ」と言われるのだが、それができない。それどころか圧され気味。

「いいじゃん、手伝ってやろうよ」

広樹はにらみ合う二人を宥めながら、ゴミ箱と大きな掲示物を持つ。

「なんだよ、広樹、お前、こいつの肩持つかよ」

広樹の助け船にいつもの調子を取り戻したような空元気でゴミ箱を受け取る。

「そうじゃないよ。このままにらみ合っても時間が惜しいってこと」

「坂田は誰かさんと違って大人だねー。さっと手を差し伸べてくれる紳士よね」

明日香は広樹を褒めるといふよりは昭利を挑発＋貶すつもりらしく、嘲笑を浮かべながら半眼で見つめる。

「うっせーな、俺だつてそれぐらいできらー」

安い挑発に真っ赤になり、昭利も別のゴミを抱えて廊下をのっしのっしと歩いていく。

「ふふ、みんな女性には優しくな」

そんな様子を隆は満足そうに見つめていた。

**

「ったくよ、なんで俺様がこんなこと」

普段は俺様などと言わないけれど、不満がある時について口にする「俺様」は、よく明日香に「何様よ」と突っ込まれる。そうすると「なんだよ」「なによ」とにらみ合う。よく見かける光景だった。

「だいたい広樹が良い恰好するからいけないんだぞ」

ゴミ捨て場到大荷物を受け捨て、ばんばんと手を打つ。

「いいじゃん。すぐだし」

「ったく、お前、何かと明日香に甘いんだから」

昭利は何げなく言うけれど、広樹はその一言で真っ赤になる。

「そんなことはないよ……。困ってみたいだし」

「ん？ ああ、そうだな」

腕組みして背を向けて帰る気満々な昭利は広樹の変化など気付かない。

「でも、昭利も沢森さんと仲いいじゃん」

「え？ 俺が？」

笠原雄太がにやにやしながらちやちやを入れると、昭利は真っ赤になって否定する。

「誰があん奴と！ あんなおとこおんな、仲良くなんかねーよ」

「ふーん、じゃあ、嫌いなんだ？」

さらに突っ込む雄太。お調子者の彼はよくこの話題で昭利をからかう。そのたびにヘッドロックからこめかみぐりぐりをされ、泣く寸前に顔を真っ赤にさせていた。

「てめー！」

今日も同じく雄太を追いかける昭利。捕まるまいと逃げる雄太だが、狭いところで逃げ場も無く、すぐに掴まれヘッドロック……。のはずが、今日は少し様子が違う。

「じゃあ好きなの？」

広樹の問いかけに昭利の腕が止まる。雄太もその隙に逃げようとするが、広樹の表情に冗談を言っている雰囲気はなく、昭利と顔を見合わせてしまう。

「どうぞ」

雄太はマイクを握る仕草で昭利にコメントを求める。

「いや、だから、そういうのはなんといいですか……。わたくしとしましても、げんだんかいでおこたえをだすべきではないとほんだんいたしますか……」

カタコトなしゃべり方を始める昭利は視線をそこかしこに彷徨わせる。

「はい、これにて記者会見を終了したいと思います。今日はお集まりいただき、まことに感謝しております」

雄太が短く締めて、ひとまずこの話はおしまい……。のはずが、腰に手を当て半眼で見つめる明日香が居た。

「はっきりしない奴ね。あたし、そういうのって嫌い」
フンと鼻息をならして去っていく明日香。ゴミ箱を抱えていた別の当番の人は軽くお辞儀してから去って行った。

「いや、ちよ、なんだよそれ！ おい！ 待てよ……」

「お？ 訂正するのか？ やっぱ好きとか？」

「うっせ！」

昭利はいつものように雄太の頭にげんこつを落した……。

中村家に集まった昭利たちは各々携帯ゲーム機を手に遊んでいた。

ゲームの内容は仲間を増やして育てて物語に添って進めていく。友達と仲間を交換したり対戦したりできる人気なソフトだ。

「あー、くそ、なんでそこで外すかな……」

先ほどから何度も悲鳴を上げつつ、雑魚やボスに負けまくる昭利。雄太はそれを見ながら「ここはあれ、そこはそれ」とヒントを出す。

「あれ、広樹はどうなん？」

雄太は先ほどから黙りこくっている広樹のゲーム画面をのぞき込む。

見るとキャラクターの会話のところどとまっており、進行を促すアイコンが点滅していた。

「どしたん？ 広樹」

雄太は不思議そうに彼を覗き込む。

「わあ、なんだよ、脅かさないでよ」

広樹はひっくり返りそうになりながら言うので、逆に雄太の方が驚いてしまう。

「驚いたのはこっちだよ。どうかしたのか？」

「いや別に……」

広樹は中村家に来てずっとこの調子。雄太も昭利も何かあったのかと首をかしげてしまう。

「昭利、おやつ持ってきたわよ」

しばらくしておせんべいとチョコレートを持った昭利の母、恵美がやってくる。

恵美はショートボブで落ち着いた雰囲気に髪をまとめている。垂れ目と泣きほくろが印象的な綺麗な人。話し方も、おっとりしている。服装は地味なベージュのショートパンツとタートルネックのセーター。ときおり「ウエストがきつい……、また太っちゃったのかな」と呟いているが、大きいのはオシリと胸。昭利を産んだ後も女としてお腹周りを引き締める努力をこなししている。そのおかげでポインキュポインな羨まれる体型をキープしている。

今でも街を一人で歩いているとナンパに遭うらしい。そのたびに「若い子と思われちゃった♪」と喜んでいる。



昭利としては恥ずかしいことこの上ないが、明日香からすると羨ましい女性らしい。一期、明日香はその体型を求めて恵美の生活スタイルを真似しようとした。結果はウエスト周りがふくよかになり、諦めたらしい。

「ありがとうございます」

雄太が立ち上がり、笑顔でおぼんを受け取ろうとする……と足がもつれたのか、恵美に寄りかかった。

「あら、危ない。大丈夫？」

恵美はおぼん片手に雄太を胸で受け止める。

「おぼさん、ごめんなさい」

雄太は柔らかい胸元から顔を上げ、申し訳なさそうに言うと、おぼんを受け取り、前かがみな感じでしゃがみ込む。

「うふふ、雄太君は気が利くけれどおっちょこちょいね」

彼の下心などつゆ知らず、恵美は雄太の隣に座り、皆のゲームの画面を見る。

「みんなそのゲーム好きなんだね。おぼさん、そういうの苦手だからわからないのよ」

「そうなんですか？ じゃあ、僕が教えてあげますよ。このキャラが……」

ゲームを指さしてぺらぺら語る雄太。恵美もふんふんと頷きながら前のめりに画面を見て説明に相槌を打っていた。

その視線はゆったりしたセーターの襟首から内側に潜り込み、グレーのブラジャーを盗み

見ていた。

「でね、ここなの」

操作をしながら肘を軽く上げて恵美のおっぱいをつつく。恵美は首を傾げながらも自分のようなおばさんのおっぱいに雄太が興味など持つはずないと気にせずにはいた。

「あとね」

「うん……えっと」

それでも肘が敏感な突起部分を擦ると、ちょっと声が上がってしまふ。

「もう、母さんは出て行ってよ」

母と一緒に居ることが恥ずかしい昭利は乱暴に言う。

「あら、昭利ったらひどいわね」

「そうだよ、おばさんだってゲーム興味あってもいいじゃん」

雄太は恵美が追い返されては困るのか、引き止めにかかる。

「うふふ、ありがとう。雄太君は優しいね。みんなこのゲームで遊んでるけど、すごい人だね」

「はい、クラスで持っていない人って居るかな？」

「女はあんまり持ってないんじゃないの？ 女ってゲーム興味無いっぽいし」

「そうか？ この前、沢森がなんか攻略教えてって来たぞ。最初の方でつまっててわからないわかんないって言ってたぞ」

昭利は笑いながら明日香がゲームに四苦八苦している様子を語りだす。

「前作やってればわかるだろってことなのにな。今回から始めたから全然わかんないだつて。仕方ないから初代貸してやったら、またわかんないって言いだしてさ。少しは自分で考えろって感じだよな」

「沢森さんもゲームやるんだ」

「全然下手くそだからな。あれは教えるの苦労するわ」

普段は勉強ができて運動もそれなりの明日香。そんな彼女がゲームごときというか、昭利ですら普通に進めるゲームで詰まる理由がわからなかった。特にアクション要素が難しいわけでもなく、ヒントを見ていれば攻略できる代物で、ストーリークリア後はどれだけ時間を費やすかでしかない。

「へー、だから最近、昭利、沢森と二人っきりで話してたんだ」

雄太がにやにやしながら指さすと、昭利は真っ赤になって慌てだす。

「俺は別に沢森なんかと！ あいつがしつこく教えて言うから仕方なく……」

「なにムキになってんだよ。そこまで言っていないじゃん。ああ、もしかして昭利、沢森のこと好きだとか？」

「そうなの昭利。沢森さんって明日香ちゃんよね。昔はよく一緒に遊んでたし」

「母さん！ そういう話はやめろよ」

「いいじゃない。明日香ちゃんも同じゲームしてるみたいだし、優しくしてあげないとダ

メよ。……あら？」

真っ赤になる昭利とそれをからかう雄太。恵美もそれをほほえましく見ていたが、ひとり話の環に入らず俯く広樹が居た。

彼はおかしにもジューズにも手を付けず、ゲームをするわけでもなく、点滅する画面を見ていた。

「広樹君？」

「あ、はい、なんですか？ ゲームなら雄太が詳しいですよ」

「ゲームより、明日香ちゃんが気になっているかしら」

「そんなことないです！ 別に僕は……」

明日香の名前に首をぶんぶん振って否定する広樹。恵美も昭利も呆気に取られて一瞬真顔になる。が、すぐに彼が何を勘違いしていたのか気付き、吹き出す。

「ちがうわよ。おばさんが明日香ちゃんのこと気になってたって話よ。うふふ、広樹君ったら、そんなに明日香ちゃんのことを気になってた？」

「いえ、そんなつもりは……全然……無いです」

「母さんが変なことばかり言うからだよ。なあ、広樹」

恥ずかしそうに真っ赤になる広樹を見て、昭利はフオローしつつ、そろそろ母に出て行ってもらいたいと視線で訴える。

「僕は別に……その」

「ほらほら、母さんも出てってよ」

「いいじゃん、昭利」

「お前さつきから母さんの肩ばっかもちやがって……」





雄太が母を交えて自分や広樹をからかうつもりなのだろうと勘違いしている昭利はむっとしつつ、母を急ぎ立てる。

「昭利ったらいじわるなんだから。でも、おばさんもそろそろ夕飯の準備しないといけな
いから戻るね」

笑顔で言い、立ち上がろうとする。その時、グラスが倒れてしまい、広樹のズボンにぶちまけてしまう。

「わわ……」

「あ、ごめんなさい」

「母さん、もう……、なにしてるんだよ」

のんびり屋で時折どじをしてしまう恵美を見て、昭利はがつくり肩を落とす。

「ごめんなさい。拭くからね」

恵美は膝立ちのままはいはいして歩み寄り、こぼれたジュースを拭く。床を拭きつつズボンに手を伸ばす。

「ああ、ごめんね。おばさんドジで……」

恵美は平謝りと慌てた様子でごしごしふくのだけれど、場所が場所だけに広樹も恥かしさを覚えてしまう。

「だ、大丈夫です！ おかまいなく」

拒もうとする広樹と拭おうとする恵美。恵美が片手で身体を支えていたことと、広樹が急に体を退いたこととでうしろによるめいてしまい、そのままどさりと重なり合う。



「あいたた……うえーん、もうわたしってば……」
立て続けのドジに恵美は半泣きになる。

「広樹、おばさん、大丈夫？」

前のめりになる恵美を起こそうとしているのか、雄太が後ろから覆い掛かり片腕を取る。するとオシリのあたりに弾力の無い盛り上がったものをあてられる。

「はい、起こすよ」

腕を引っ張って起こそうとしているらしいが、片腕だけ引っ張られるので体勢が斜めになるだけ。

「よいしょっと……」

それでも懸命に引き起こそうとしているらしい雄太。うつぶせから少しオシリを上げた感じの恵美を引っ張る。

「え？ あ……」

恵美はショートパンツ越しにオシリの筋をなぞる物を感じた。雄太がデニムのズボンをはいていたから、そのボタンの留め具部分が当たっているのだろうと思うが、少し様子がおかしい。

オシリにぴったりくっつき、上下に何度か往復して擦られているような感じがする。腕を引っ張られて姿勢がうつぶせから少し半身を開く形になると膝が少し立つ恰好になる。そしたら股間の辺りを突くものがあった。

「あん……」

布地の薄いショートパンツは柔らかく、こんもり尖ったモノが密着すると、微かに身体がドキリとする。さらにそれだけではなく先ほどから胸元をもぞもぞするモノがあり、凹凸が時折乳首に当たっていた。

「ん……うふう……」

身体がこわばり、軽く上ずりながら息を吐く。

「むぐ、むぐぐ……」

そして苦しそうな広樹の声に状況を察する。

「あ、ごめんごめん！」

慌てて起き上がる恵美だが、床が濡れたせいで膝が滑り、また倒れ込む。そこへちようど自分で起き上がるうとしていた広樹の顔があり……。

「むちゅ……んちゅ……」

広樹の顔面が迫ってきたと思ったら鼻先が触れ合い、唇の少し上にキスをしてしまう……が、驚いた拍子にまた滑り、唇と唇が触れ合った……。

「んちゅ……ちゅ」

慌てて「ごめん」と言おうとしたところで唇が広樹の唇を受け入れる。舌先がぺろりと彼の下唇を舐め、先っぽが触れ合った。

「……え」

息子の同級生、年下の男の人の唇に触れ、さらに舌先を触れ合わせてしまった。さすがの出来事に恵美も真っ赤になる。

「なにやってるんだよ。大丈夫？ 二人とも」

心配そうに言う昭利の言葉で我に返り、慌てて俯き視線を逸らす恵美。

「ごめん、母さん、ドジすぎて……。広樹君、ズボン汚れちゃったし、お風呂で洗っていいよ」

「大丈夫です、これぐらい」

「ダメよ。私のせいで汚しちゃったんだし、お洗濯させてもらわないと……。昭利のズボンとパンツ、あ、新品のあげるから安心してね」

冷静を装いたい恵美は取り繕うように早口で捲し立て、広樹の手を引っ張っていた

「でも」

「いいよ。母さんが悪いんだし、そのままどなんかもおもらしたみたいだから借りてっ

てくれ」

昭利も頭を下げながら広樹を促した。

「そう、じゃあ、お言葉に甘えて」

広樹は真っ赤になりながら恵美についていった。

「ったく、もう、母さんは本当に……」

母のどじっぷりに苦笑しつつ、広樹のゲーム機が濡れないように机の上に置く。

「いいなあ」

「何がいいんだよ。たく」

階段を降りる音に紛れて雄太はそんなことをぼやいていた……。

2. 日常の影で

「さ、脱いで。しみになっちゃうから」

「わわ、大丈夫です。一人で出来ますよ」

広樹は脱衣場に連れていかれてシャツを脱がされる。そのままズボンまで脱がされそうになったところで慌てて止める。

このままされるがままに脱がされるよりは自分でと思い、背を向けズボンに手をかける。そしてブリーフまでしっかり濡れていることに気付く。

「パンツも洗っちゃったほうがいいよ。まって、今出すから」

恵美は洗濯槽にあった洗う予定の物を取りだし、カゴに入れ、代わりに広樹のズボンシャツを入れる。

「乾燥機あるからすぐ乾くわ」

「……」

友達の母の前でズボンとパンツを脱ぐことに抵抗がある。広樹はもじもじしていたが、恵美はそれを遠慮ととらえたらしく、強引におろす。

「……きや」

ブリーフからぼろんと顔を出す広樹のチンポ。反動で勢いよく上下し、恵美の顔にてろんと触れた。

「あ、ごめんなさい……」

恵美は軽く悲鳴を上げたあと、チンポの先っぽが撫でた部分を手でさする。痛いわけではないだろうけれど、少し顔を下げつつ何度かさすっていた。

「大丈夫よ。おしっこでもがまんしちゃってたのかな？ それよりお風呂に入ってジューズ洗い流してね。そのままにするとべとべとするし、かぶれちゃうかもしれないから」

笑顔を見せる恵美の頬には涙のような痕が見えた。

まさか泣いているはずはないだろうと思いつつ、広樹はチンポを見せながら居るのも具合が悪く、お風呂場へ逃げた。

シャワーを捨り、お湯が出るのを待つ。

先ほどから収まりの付かないチンポが恥ずかしかった。

朝になるとよくこうなる。この前はパンツがべとべとになっていたりと、何かの病気なのかと勘ぐってしまう。けれどチンポのことなので親に言いづらい。

べとべとになったのは数日前の二度だけで、チンポが固くなってもしばらくすれば小さくなるのでだんだんと心配は薄れていった。

それでも講義の時にそうなってしまうと恰好悪く、特に体育の時、明日香を見て大きく固くなるのが困る。他にもグループ学習とかで女性と一緒に居たり、話したりしているとそうなってしまう。

「……」

よく見ると、先端からとろーっと粘液が零れていた。指で掬うとねとねとしており、生臭い。イカのような臭いがする。

「なんだこれ？」

臭いと見た目、糸を引いている様が気持ち悪く、チンポを「しごき」と洗う。

おしごきとは違うそれはじゅくじゅくつと滲み出てくる。無理に洗おうとすると、チンポの先っぽの皮が引っ張られる感じで痛い……のだが、今はあんまり痛くない。それどころかじわ〜とした心地よさが股間から広がってくる。

「え……なにこれ……」

よくわからないながらにシャワーをあてながらチンポをしごく。すると皮が捲れ、真っ赤な部分が見えだす。

「え、これって平気なの？」

濃くぶよぶよした部分が捲れ上がって見え隠れする赤い部分。ミミズの頭のような亀のような頭のそれにお湯が当たるとびりびりする。

最初は痛い感じだったけれど、だんだんと気持ちよい感覚が訪れる。

「……」

ぼんやりしながらシャワーをチンポに当ててくいくい引っ張る。

徐々に強くしていくと、快感も強くなり、もう少し、もう少しと求めている内にぺろんと剥けて真っ赤な部分が出た。

「うわ。どうしよう！」

皮に隠れていた部分が外に出たことで広樹は焦った。

真っ赤なミミズの頭のようなそれは歪な亀の頭のように、返しの部分や表面に白いカスがついている。

もしかして病気なのだろうか？

白いのはこの前出たべとべとで、こういう風に溜まっていたのではないだろうか？

この赤いのは内臓の一部で、それが露出しているのかもしれない。

ぐるぐる思考が巡り、元に戻そうと皮を引っ張る。

「わぁ……」

また気持ちよくなり、先端の穴からとろっと粘液を漏らした。

「どうかしたの？ タオル、ここにおいとくね」

恵美の声を聞いて、ぐっとチンポに力がこもる。一回り大きくなった感じで、根本の部分が締め付けられる痛みを感じた。

このままでは元に戻せないと思い、チンポが小さくなったところで戻そうと考える。しかし、具体的な方法もなく、ただ収まるのを待つしか思いつかない。なので落ち着くためにも今日は帰ろうと、シャワーを止めてお風呂を出た。

「タオルタオル……」

タオルを探しカゴを漁る。しっとりとした布地が見つかったので取り上げる。水色のふんわりした素材はパンツだろうか。昭利のプリーフにしては小さい気がしたが、そのままズボンをはくわけにはいかないので借りることにする。

手に取るとつんと鼻を突く臭いがした。おしっこのような感じ。臭いのだけけど、なんとなく後を引く香り。なんだろうと思いつつ顔を離して鼻をひくつかせると、目の前がくらくらとしてお腹の辺りもややもやします。すると少し収まったはずのチンポがまた力みだし、尿道がじんわりする。

「え……」

よく見るとそれは女物のパンティだった。穿いていたものらしく、クロッチの部分に染みがある。そこから匂いが漂っていた。

「まさか、おばさんの……」

恵美のパンティだとわかり、真っ赤になって顔を背ける。けれど、パンティをしっかりと持ち、離さない。

「だめだよ、こんなことしちゃ……」

首を振るが、やはり離さない。さらにカゴを見ると、同じ色の見慣れないものを見つける。

それはブラジャー。恵美はともにおっぱいが大きく、当然ながらブラジャーも大きい。

パンティを掴んだまま、おそろおそろ手を伸ばす。

そして蘇る先ほどの記憶。

恵美が自分に倒れ込み、おおきなおっぱいで顔を挟まれた。とても柔らかく、良い匂いがした。

時折聞こえる高い声。もぞもぞしていると少し硬い部分があつて、そこに触れるとぴくんと震えていた。

そのおっぱいがこのブラジャーに包まれていた。

内側を擦り、少し舐めてみた。無機質な布の肌触りしかないが、恵美の残り香があつた。

またじゅくくとチンポが力んだ。見るとどろどろと垂れる粘液があつた。

「……なんだこれ……」

生臭い臭いに眉を顰めつついると、脱衣場が開けられる。

「終わったかしら？ あ……」

恵美が脱衣場のドアを開けた時、広樹はまさに恵美のパンティとブラジャーを持っていた時だった。

「わわ、これは、その……」

慌ててチンポを隠そうとしたら、パンティとブラジャーがチンポについてしまう。

「広樹君、それはお婆さんの……」

自分のパンティとブラジャーが広樹の股間に行くのを恥ずかしく思った恵美は焦って手を伸ばし取り返そうと引っ張る。するとパンティとブラジャーが勃起したチンポに絡みつく。

「いた、痛いです」

「ご、ごめん。すぐ取るから……」

慌てた拳句に絡みつきチンポを締め付けるパンティ。恵美は痛がる広樹に注意しながら絡まった布地を取るうとする。

「あ……う」

剥けて真っ赤なチンポからだらだとカウパー腺液がこぼれ、指に絡みつく。その指先が広樹の亀頭をぬるっと撫でるとチンポは嬉しそうに上下し、またどろろと滲みだしていた。

「……ごめんね、すぐ取るから……」

若い男の初々しい真っ赤なチンポ。痛そうなくらいに勃起してどろどろと我慢汁を垂らし、指先で煽られて上下する。

「あわわ、ごめんね。えと、ここがこうで……」

陰囊を擦り絡まった金具を取る。青いパンティは広樹の我慢汁でべとっと染みが増えてくる。

広樹は昭利と同じ年ながらに射精の快感を経験しているらしく、我慢汁の中に濁りが見える。若いだけあって我慢汁の出る量も多く、夫の伸明のと比べてそんな色なく、さらに勢いがある。特ににおい。自分で処理していないのか、男の匂いがむせ返るように香り、眼前で漂う匂いに恵美はぼんやりしてしまう。

「……」

気付くとぼうっとしたまま、チンポの竿を握り、陰囊を弄り始めていた。

広樹は指の動きで快感を覚えているらしく、上を向いて声が出ないように口を押えていた。その仕草が初々しく可愛らしく、手間取っているふりをしてもう少し眺めていたくなっていた。

「……ごめんね、お婆さん、不器用で……」

オスのフェロモンを嗅ぎ過ぎ、気持ちが昂りつつあった恵美はチンポを舐められそうな位置で広樹を仰ぎ見て口を開ける。

ぺろりと舌先で唇を舐め、ぴちゃぴちゃと音を立てる。鼻息をチンポに当てながらパンティを取る。

「あ……あ……」

視線が交差した時、階段を降りる音がした。

「おばさーん、広樹は〜？」

雄太の声ではっとした恵美は我に返り、チンポを握ったまま、ぎゅっと下にしてしまう。

「あー！」

昂っていた広樹は突然強く握られたことと、ぐいっと下に引っ張られて亀頭を刺激されたことで快感が抑えられなくなる。

「あ、あ」

次の瞬間、広樹のチンポ、鈴口からびゅっと白い液体が迸り、恵美の顔にかかる。

「え、あ、きゃ、広樹君、大丈夫？」

射精させてしまったことに慌てふためき、恵美は広樹のチンポをおさえる。それがさらなる刺激になり、びゅっびゅと精子を吐きだす。

「あ、ごめん、痛い？ だいじょぶ？」

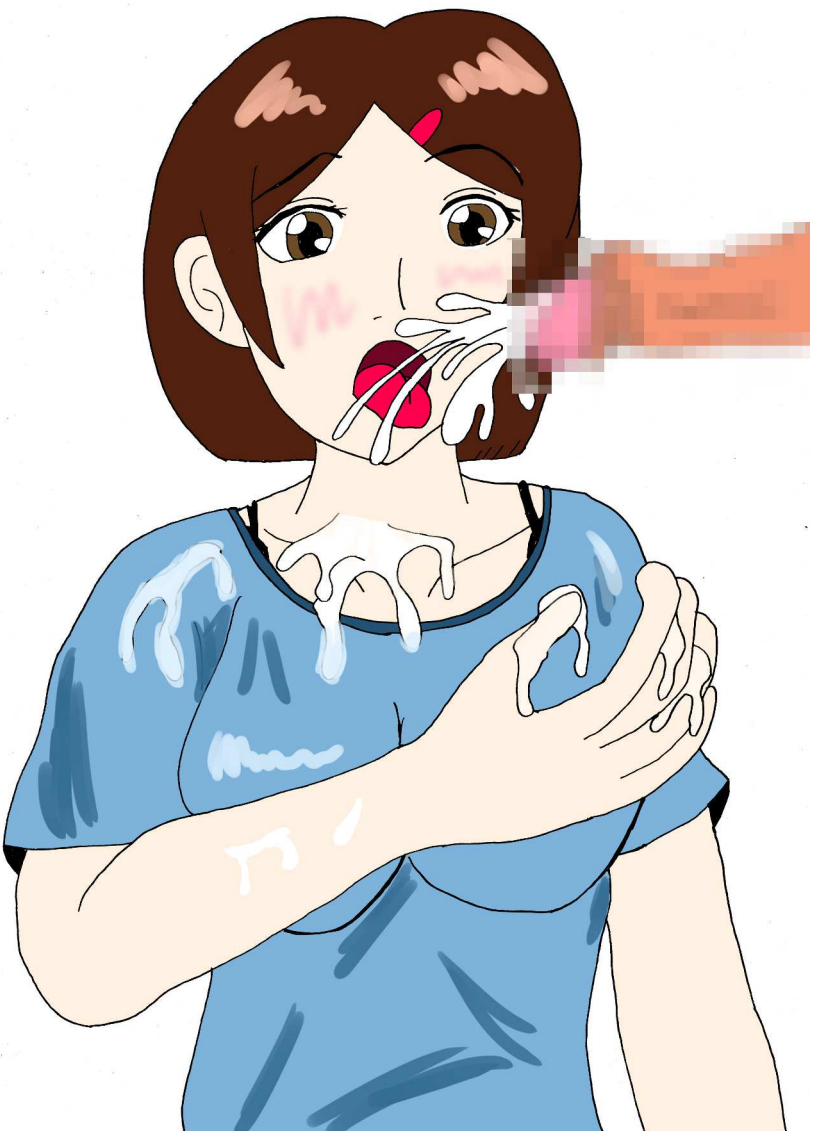
慌てふためく恵美は射精しているチンポを夫のモノを扱う時と同じくぐいぐい絞り、上下させる。

「ああ、ああん！」

射精中で敏感になっていたチンポを上下にしごかれた広樹はあまりの快感に悶えて声を上げる。

「え……あ……」

目の前にチンポがあり、胸や服、顔や舌にどくどくと粘液が降り注ぐ。



「はい、僕、誰にも言いません……」

言えるはずがない。広樹は直立不動のまま答えるので、恵美はくすりと笑う。そしてまだ大きくなったままのチンポの先っぽをちよんと指で撫でる。

「変なことしちゃってごめんね。気持ち悪かったでしょ？ 忘れてね」

「う、うん、うん」

首を縦に振り、急いでパンツを履き、ズボンを穿く。昭利のズボンは少し緩かった。

「あ、あの、おばさん、僕、今日は帰りますね」

「え、あそう？ うん、それじゃあね」

慌てて玄関へ急ぐ広樹は裾を踏んで転んでしまう。

「大丈夫？ 広樹君」

恵美が駆け寄り手を貸す。すると、また顔が近づく。

「大丈夫？ ぶつけて無い？」

柔らかそうな……、柔らかい唇。真っ赤に濡れていて、舌先がいたずらっぽく蠢く。

クラスの女の子おしゃべりで口うるさいそれと違う、成熟した大人の魅力が溢れるモノ。明日香のそれよりもずっと魅力がある。

それと先ほど、触れ合った。舌先も触れ合った。柔らかいけどザラリとしていて生暖かくて、どきどきした……。

キスをしたのだ。

初めてのキス。

「へ、平気です」

そう思うと広樹は真っ赤になり、顔を背ける。

「さ、ようなら！」

妙なイントネーションになりつつ帰る広樹に、恵美は眉を潜めつつ「はあ」とため息をつく。

「わたしってば、ほんとドジね。何してるのかしら……。変なことしちゃったし……。反省しないと……」

自分のドジと慌てやすい性格を反省しつつ、恵美は家に戻った。

「おばさん、どうしたの？ 広樹は？ 風呂じゃないの？」

雄太が風呂場から顔を出し、不思議そうに尋ねる。

「あ、うん。広樹君は先に帰るって。なんだかお熱でもあるみたいだったわ」

お熱なら、先ほど自分が上げさせてしまったけれど……。恵美は唇に手を当て「おほほ」と笑いながら台所へ戻った。

雄太のポケットが膨らんでいることなど気付かず……。

3. 縮まる距離

「……」

放課後、掃除当番の無い昭利は今日もゲームをしようと帰ろうとしていた。

「ちよっと昭利、手伝ってよ」

すると同じように明日香がやって来る。

「なんだよ。ゴミなら今日は軽いだろ」

他の子が今日は一人で持てるらしく、抱えて講義室を出ていくのが見えた。

「違うわよ。今日は窓ふき。高いところだからできないのよ」

「そんなの机の上に立てばいいじゃん」

「いいじゃん、手伝ってよ」

「しゃーねーな」

明日香は一度言いだすとしつこく、断ると時間がかかる。しかも最期は俯き泣きそうな仕事をして良心を突いてくる。そうなると他の女から色々言われてやりづらい。

昭利は机を窓近くに持っていき、窓を拭き始めた。

「ありがと。半分でいいからね」

明日香の笑顔に照れ隠しでムスっとしつ、端っこから拭く。

クラスでも背が高い方なので高いところまで届く。確かに自分が頼まれても当然だと納得できた。

「お、昭利、掃除手伝ってるのか？ 感心感心……、ああ、なるほどな、そういうことか」

机を運んでいた隆が昭利の作業を労うが、明日香と一緒にいるのを見て含み笑いをする。

「な、別にそんなつもりじゃないっての！」

それに気づいた昭利は隆に抗議の声を上げる。

「すまんすまん、邪推だったな」

「ったく、そんなことよりさっさと掃除するぞ」

「……」

昭利は雑巾片手に窓に向きなおると、明日香は少し俯きつつ、上目遣いで彼を見ていた。

「なんだよ」

「別に？ ただ、そんなにヤかって思ってる」

「そりゃからかわれるんだもん、やだよ」

「気にしなければいいじゃん」

「男は舐められちゃ終わりなんだよ」

「ちっさい男ね」

「なんだと！」

「なによ」

「おーい、掃除さぼるなよ」

「はい……」
いつもの調子に戻るとまたこの調子……。

「……よしよっと」

しばらくして昭利は講義室の窓の半分を拭いたけれど、明日香はまだ終わっていない。女にしては背が高いけれど高いところに手が届いていないからだ。

昭利は無言で彼女の後ろを抜け、代わりに拭く。

「ありがとう」

「しゃーねーじゃん、お前ちっさいし」

「なによ！ 独活の大木のくせに」

「ほらほら、お前はそっちの低いところ拭いてろ」

「うん、わかった」

言い合いよりも掃除を終わらせることを優先する昭利は彼女の挑発に乗らずに窓を拭く。明日香は不満そうだったが、手伝ってもらっている手前、残りの窓をしぶしぶ拭く。

「よし、終わったぞ」

机を戻し、昭利は明日香の方へ行く。彼女の机はすこしぐらついており、そんな不安定場所なのに、彼女は身体を折り変な姿勢で窓を拭いていた。

集中すると周りが見えなくなる性格なのか、降りて背伸びしながら良い場所まで机の上に乗って拭いていたのだ。



「おいおいおい……」

苦笑交じりの昭利は明日香の背中をぼんぼんと叩く。

「降りた方が早いって」

「え？ あ、そっか。えへへ、あたし馬鹿だね」

素直に従う明日香はトンと机から降りる。

「わ……」

すると足を捻ったのか昭利の方へ倒れ込む。

「……」

昭利はそれを受け止め、肩を支える。けれど明日香はそのまま昭利に抱き着いてきた。

「おいおい、あぶねーな。狭いところで飛び跳ねんなよ」

「……ごめん。ちょっと足がもつれて」

押し返そうとしたのだけれど、明日香はまごついてそれを拒む。

女の身体が密着する感覚はこぼれぬ。彼女の髪が頬や額に触れたから。

甘い香りがする。シャンプーなのだろうか。少し汗の臭いもする。

気持ちがおもちゃとして、胸がどきどきする。鼻息が荒くなりそうなどころでようやく離れ

た。そうしたらきつと「スケベ」と言われるのだろう。だから「誰がお前なんか」と返して……。

「ごめん」

しかし、返ってきたのは素直な謝罪。昭利は氣勢をそがれて頭をかいてしまう。

「いや、別に……」

最近、調子が狂うことが多い。掛け合い夫婦漫才のようなやり取りをしていた時はうざりたい、いらつかせると思っていたけれど、こういうちくちくした感じの雰囲気は変な息苦しさがある。

胸もどきどきと心臓がうるさく、顔も熱くなってしまう。きつと鏡を見たらゆでだこのようになっているのだろう。

それは明日香も同じで顔が赤かった。もしかしたら彼女もドキドキしていたのかもしれない。

そういえば彼女は今日、珍しくスカートだった。そのせいか、いつもより女らしい。そういう恰好をすればクラスでも上位に入る可愛さがある。いつものダブダブした服装でそれを隠していないせいか、いつにもましてそわそわさせられた。

「じゃあ、雑巾……」

「うん、ありがとね。いつも」

「いいよ。その代り、今度のグループ学習の感想欄手伝えよ」

にやりと笑いながら告げたらきつと彼女は「さぼるな」とか「ずるい」と返すはず。そうすれば、この胸の高鳴りも顔がチクチクする感覚も収まるはず。

「うん。一緒にやろうね」

赤みがかった顔のままにこっと微笑む明日香の返事に、昭利はまたも胸が高鳴った。

「なんだなんだ？ 昭利ってばデートかよ」

すると都合が良いのか悪いのか雄太が茶々を入れる。

「なんだよ、それ！」

「グループ学習の班分けで一緒になるつもりなんだろー？ ひゅーひゅー、おあついねえ！」

「てめ、誰が！ この野郎！」

「あはは、真っ赤になってらー！ 昭利は明日香が好きなんだろー！ なあ、広樹！」

雄太は広樹の後ろに隠れてからかうのを止めない。

「そうなんだ。ふーん」

広樹のことだから何か反応があるだろうと考えていた雄太は、そのフラットな反応に肩透かしを受ける。

「おい、どうしたんだ？ ぼーっとして」

おおよそ明日香に気があるだろう広樹ならきつと何か慌てふためくはず……。その目論見が外れ、その隙に昭利に掴まる。

「いてて、放してよ、昭利！ いたいって！」

「なにが！ この余計なことを言う口をだな……」

「もう、男ってばバカなんだから……」

その様子を見ていた明日香はもういつもの彼女に戻っており、ふっと息を着き、掃除用具を片づけ始める。

「ねえ、昭利、今日もどうせゲームしてるだけなんですよ？」

「え？ ああ」

「じゃあさ、手伝ってよ。通信交換だっけ？ あれしないと手に入らないキャラいるからさ、お願いしていい？」

「ああ、そういえば何匹か居たな。俺もアイテムで欲しいのあったし、雄太は？」

「俺はケーブルが合わないよ。広樹のがないと無理」

「そっか、じゃあ、今日は鬼瓦高原公園で集まってゲームすっか」

「え、昭利の家じゃないの？」

「また母さんがうるさいからやだよ。それに四人だと多いだろ？」

「そう？ 久しぶりにおばさんに挨拶したかったけど、まあいいわ。お願いね」

放課後の予定が決まった四人は残りの掃除を急いで終わらせて帰って行った……。

鬼瓦高原公園へやってきた昭利と明日香は、休憩スペースに荷物を置く。屋根と丸太のベンチ、テーブルがあり、人が集まるのにちょうど良い。

先に来ていた雄太はゲームを始めており、昭利と明日香を見て手を止める。

「遅かったな」

「ああ。ちよつとな。明日香が自転車じゃなかったから」

「一緒だったんだ」

にやにやしながら見る雄太にチョップをお見舞いしてベンチに座る。

「あれ、坂田君は？」

時間に厳しい広樹がまさかの遅刻に明日香も昭利も首を傾げる。普段ならいつも先に待ち合わせ場所に居るのに。

「まあいいや。とりあえず交換しとこうぜ」

昭利は明日香のゲーム機を起動させ、キャラクターの交換の準備をする。

「へえ、これだけでいいんだ」

「ああ。そうすつと進化するから、そのままにしておいて」

「ステータスは上がるの？」

「レベルに比例して固定だからいつやっても結果は一緒だよ」

「へえ」

それほど気にしているようでもなく、適当な相槌を打ち、終わるのを待つ。

「ねえ、このキャラ可愛いな。頂戴よ」

明日香が指したのは最近ようやく手に入れたレアなキャラクター。氷をモチーフにした幽霊のお姫様。人気があり、商品化していてゲーム機のストラップにしている子も多い。

「え？ これは待ってくれよ……」

「いいじゃない、女の子キャラじゃん。昭利つてもしかしてこういうゲームの女の子が好きなの？」

「そういう意味じゃ……。だって、俺のパーティに氷と幽霊系ってこのキャラしかいないくてですね、今から行く怪奇炎の魔竜対策に必要なんだよ……」

ストーリークリアに重要なことを訴えてヘッドハンティングを阻止する昭利。その必死さに明日香も仕方なく別のキャラを選ぶ。

「ふーん、昭利のへっぽこメンバーじゃ仕方ないわね。ならこの子頂戴よ」

今度は炎の踊り子のような女の子。こちらはストーリー上、必要度が下がっているが、キャンペーンの為に街のコンビニを巡って手に入れた思い入れのあるキャラ。

「ちよ、なんでおまえ、俺のキャラもらうこと前提になつてんだよ。これもどれも俺がどんだけ苦労したと思つてんだよ……」

「けちく。どうしてそう女の子ばかりなのかな」

「だから、明日香が選ぶキャラがどれもレアだったり、せつかく引き当てたキャラなの」

「じゃあ、何だったらいいのよ」

「そうだな。じゃあ、この虎猫なんかどうだ？ 見た目は弱そうだけど、最初からメンバーに居た古株だ。ステータスも技の熟練度もかなり成長してるから使いやすいで」

「へえ」

画面を覗くと頼りないトラ猫が居て、頭を撫でていた。弱そうな外見だけれどレベルが高く、技の熟練度もどれもマックスまで育てられている。

「いいの？」

多少なりゲームの知識を得た明日香にも費やした時間が伝わり、さすがに悪いような気がしてきた。

「できれば貸すだけでお願いします」

「そう。じゃあ、借りるね。ありがとう」

「……. ったく、強引なんだから。でもトラたんが居れば明日香のバージョンだとラストまで行けるよ」

「トラたん？」

「さんにしてしまうとしたら間違ってた」にしちゃったんだよ」

「ふふ、トラたんだって、カワイイ。やっぱりあたしの子にしちゃおうかな」

「ちょ、勘弁してくれよ……。俺のとらたん……」

「冗談よ。ええと、これで交換終わり？」

「まだ。俺が受け取ったキャラを戻さないとダメだから、余ってるキャラと交換だよ」

「そう。じゃあ、トラたんの人質にこの水の子を貸すね」

「良いの？ 俺、これまだ凶鑑登録してなかったんだわ。ありがとう」

「そう？ んふふ、感謝なさいね」

渡りに船と昭利は喜び急いでキャラを交換する。凶鑑登録が終わったところで設定を見ていた。

「……. でな、トラたんの乱れ引つ掻きは会心確率が一回一回にあるんだよ。だから防御を固めた奴でも結構ダメージ通っちゃうんだよ」

しばらくトラたんの性能について熱く語っていると、ようやく広樹がやって来る。彼は手に紙袋を持ち、腕組みして何か困っているようだった。

「おせーぞ、広樹」

「ごめん。ゲーム探してたんだけど、見つからないんだ。どこにやっちゃったんだろう」

「失くしたの？」

「うん。この前からずっとない」

「最近やってなかったのか？」

「うん。ちょっと遊んでなくて……」

「へえ、珍しい」

ゲーム好きな広樹がゲームをせずは何をしていたのだろうか？ 昭利は意外そうに言う。

「どっかで落したとか？ ほら、この前、サッカーの時とか」

「わかんない。どこかにおいたんだと思うんだけど」

「じゃあ探しに行くか？」

「いいよ。でも、ちょっと心当たりがあるかな。今日は探してくるから、ごめん」

「そう？ うん、わかった」

「その紙袋は？」

「この前借りた昭利のズボン。洗ってアイロン掛けてもらったから、忘れないように持ってきた」

「そう。じゃあ、後で家に持って帰るわ」

「……ああ、うん。いいよ。おばさんにお礼言いたいし、自分で届けるよ。それじゃあね」手を振りかけていく広樹を見送りつつ、昭利は不思議そうに首を傾げる。

「ズボンのことは母さんが悪いんだし、お礼なんていららないと思うけどな」

昭利はぶっきらぼうに言うと言とベンチに座る。広樹は残念そうに戻って行った。

「なんだろうね。ちょっと雰囲気変わった？」

そんな広樹を見て明日香は首を傾げる。

「そう？」

「だって、いつもはもっと変にそわそわしてるっていうか、目を見て話さないし」

「そうか？ 別にそんなことないと思うけどなあ」

昭利は他人が他の人の目を話しているかを注視したことはない。少なくとも広樹と話をする時、彼は自分の目を見て話している記憶がある。ただ、彼が彼女に好意を抱いているというのであれば、照れが原因でそれができないのも頷ける。と、同時に胸騒ぎが出てくる。

「だね。あいつ、明日香ちゃんのこと好きだから、いつもてんばっちゃってまともに話せないのにな」

「「なっ！」」

明日香と昭利は雄太の言葉に慌てふためき声を揃えて首を振る。

「まさか、広樹君があたしのことなんて」

「そうだよ、あいつが明日香みたいな乱暴ヒス女……」

「そうそう……ってだれが乱暴ヒス美女よ！」

「美女は言っていないって」

「とにかく、どういう意味よ！」

「ほら、そういうところ」

「うっさいわねー！」

ギャーギャー喚く二人を雄太はにやにやしながら見ていた……。

ひとしきり騒いだ後、水掛け論から決着がつかず、ゲームで勝敗をつけるには明日香が不利過ぎるのでバトミントンで勝負となった。

明日香は最初からそのつもりだったらしく、ラケットとシャツルを準備していた。そのせいで自転車に乗れなかった。

「よいしょっと！」

「ほーいっと！」

お互い運動が得意なのだが、やはり男である昭利の方が運動量で勝る。彼はこっそり手を抜いて明日香に打ちやすいように調整してラリーを続けていた。

「もう！ これでどうだ！」

鋭いスマッシュはさすがに取れず、昭利は地面にどさっと倒れ込む。

「おーい、そりゃないぜ。ちくしょー、サッカーだったら勝てるのによー」

鬼瓦サッカークラブに所属している昭利は週に三回早朝練習があり、土曜の午後、日曜の朝に練習をしている。今年からスタメン入りができそうなこともあり、ゲームも身が入らずに遅れがちだった。

もちろん、サッカーすればワンサイドゲームになるとわかっており、本気ではない。それよりも、一つ、思惑があり、その為のせいこい布石……。

「ふふーん、正義は勝つ！ さ、暴力ヒス女を撤回してもらおうかしら？ 最強カワイイ優しくて賢いステキ美女！ わかった？」

昭利の思惑などよそに明日香は勝利の余韻でうきうきしながらそう告げる。

「……そう呼ばれたいのか？ 別にいいぞ。明日香が良いならな」

おかしな通り名で呼ばれることを想像し、冷や汗をかく明日香。今ここで昭利に呼ばれる程度ならいい気分で見られるかもしれないが、学校でそう呼ばれたら恥ずかしすぎる。

「……………やっぱいいや」

「そうか。じゃあ、次の勝負だ」

「ふーん、ま、軽く捻ってあげましょうかしらね」

勝って調子に乗る明日香はラケットを扇子のようにしてくすくす笑う。

「偉そうに言っちゃって！ 今度はさっきのようにかねーからな」

再びシャツルを取り、二回戦を始める。その向こうでは一人放置された雄太があくびを噛みこらす。

「ねえ、俺ちょっと用を思い出したんだけど、帰るね」

「ああ」

「ええ」

二人ともバトミントンに夢中になってから返事を返す。それでも了解を得たので雄太はさっさと荷物をまとめて公園を後にする。その方向は先ほど広樹が向かったのと同じ方向だった。

4. 違和感

日が沈む頃になってへたり込む昭利と明日香。二人とも汗びっしょりになり、肩で息をしていた。

「はあはあ、やるわね」

「お前もな……。つていうか、雄太は？」

「さあ？ さっき帰ったんじゃないか？」

「だっけ？ 覚えてねーや」

「あーあ、疲れた。もう、昭利に付き合うといっつも疲れる」

「俺のせいだよ」

立ち上がり、背伸びをする昭利を明日香は下から見上げる。そして手を伸ばした。

「なに？」

「ひっぱって。立つのしんどい」

「……ったく」

腕を引っ張り起こしてあげる。けれど反動と疲れでお互い足がもつれてしまう。

「あ、ごめん……」

明日香が昭利にもたれかかり、鼻先が触れ合いそうな距離になる。

「……」

繋いだ手を押し返しても拒めない。真っすぐに見つめ合いしばらく無言になる。

汗でびっしょりになったシャツ姿で密着すると、互いの肌が近くなつたような感覚になる。温かい、というか熱い。それにうるさい。お互い無言で見つめ合っているだけなのにうる

さい。鼻が詰まるような感じ。無理やり呼吸するから明日香の前髪が揺れる。瞬きをされた。

それでも目が離せない。

昭利も本当のところ、明日香が可愛いと思うことがある。普段、友達と笑顔で話すところをちらりと見るとごくりと喉が鳴る。そのくせ話す機会があると、競い合っているようなことを言うし、睨み合うせいで表情も彼女の可愛らしさが薄まってしまう。

けれど今はそれが無い。

明日香は半開きの口を閉じたり開いたり繰り返して、昭利が何かしゃべるのを待っているような、期待しているようだった。

昭利はその不安気でもどこか期待を帯びた瞳を前に言葉が選べない。

「……」

普段見せてくれない、少なくともこんな近くの距離では絶対にしてくれない表情。もう少し眺めていたい。目に焼き付けておきたいのに、時間はそれを許してくれない。

「あのさ、今度……さ」

「うん」

明日香の表情がぱっと明るくなった。同時に昭利の気持ちもふわっとした。

「またどっかで、練習、一緒にさ……」

「うん」

「二人で……」

「二人で！」

手を握られる感触が強くなる。彼女がもたれかかる感じが強くなる。そのまま抱きしめた
い気持ちが強くなる。

「……」

遠くを走る車の音がした。

「……」

二人とも目線の端でそれを捉えてしまう。担任の志垣隆の車だった。

「あ、その……」

「えと……ごめん」

二人の世界を壊した青い車の走音は公園の向こうへと遠のいていく。一度離れた距離と同じように。

密着していた身体を気持ちと一緒に離し、昭利は頭の後ろで腕組みしながら空を見る。明日香は手を合わせながら俯いていた。

「ねえ、今度二人で？ どうするの？」

それでも明日香は続く言葉が気になるらしく、むりやり話を戻してくる。

「ああ、そのなんだろ。サッカーの応援してほしいなって。ほら、今度、俺、レギュラー入りしそうだし」

「そ、サッカーね……。うん、いいよ」

「ああ、皆で応援に来てくれよ」

「うん」

にこっと微笑み返してくれる明日香にほっとする。昭利は正解を引いたのだと自分に言い聞かせ、帰り支度をする。

「意気地なし」

けれど背中に投げられる言葉は不正解を示し……。

「そんなじゃな。トラたん、大切にしてくれよ」

別れ際、昭利は手を振り、長年連れ添った相棒の無事を祈る。

「うん。ありがと。これで一気に追いつけるといんだけど」

「ストーリーだけでも結構面白いし」

「うん」

帰り道、少しぎこちなさがあったけれど、トラたんのおかげで緊張がほぐれた。むしろお

互いの距離が縮まったようで、素直に話ができた気がする。

「じゃね」

明日香の家の前で別れた。女なのだから送っていくという紳士的な気持ちなのか、もう少し一緒に居たいのか、とにかく送っていた。

まだ日は沈んでいないから、もう少しぐらい……。

後ろ髪を引かれながら、昭利は家路についた。

「あれ？　なんでだろ」

家に帰ると洗濯物が干しっぱなし、二階の窓が開けっぱなしだった。いくらドジな恵美でもそんなことはしない。戸締りだけは十分に注意するのだが……。

「ただいま！　あれ、なんか焦げ臭いな……」

昭利は慌てて台所に行き、グリルを見る。

火は使っていないけれど、何かを焦がした痕があった。窓を開けっぱなしの原因はこれだと予想できたので、うちわで煽いで回る。

「……あれ？」

お風呂場で水を流す音がした。普段なら父の帰りを待つて一番風呂を促す恵美なので珍しく感じた。

昭利はべとつくシャツを洗濯籠に投げ入れ、タオルで軽く拭き、シャツの代わりに寝間着の上だけ着る。

「なんだこれ？」

寝間着を着ながらゴミ箱から漏れているカラフルな包みを見る。内側に油のような変な臭いがするプラゴミ。見た目はお菓子のようだけど見たことがない。なんとなく触るのが嫌だったので丸められたティッシュユでぐいっと押し込んだ。湿った感じがして、何かを溢して拭いたのかもしれない。

「……昭利？　帰ってるの？」

「うん。さっき帰ったよ」

「そう。じゃあ洗濯物入れといて」

「わかった」

昭利は荷物を玄関に置くと、洗濯ものを取りに庭に出た。

「あれ？」

リビングに入ろうとしたらしっかりと鍵がかかっている。焦げ臭さを逃がすなら台所に近いリビングも開けておけばいいのと思いつきながら、玄関に回った。

リビングに洗濯ものをかけなおし、自分の上着を持って帰る。

「あらら、母さん、また広樹のパンツ忘れてやがる。来なかったのかな？」

笑いながらたたみ、今度届けてやろうとする。

「……ん？」

違和感を覚えつつ、何が変なのか気付かず、昭利は部屋に戻った。

そろそろ父が帰って来る。今日は明日香のせいでかなり疲れたけれど、気分が良い。ただ、少し胸が痛い。そして寂しさが残る。

「意気地なしか……」

その通りだと思いながら椅子に座り、背もたれに身体を預ける。

ゲーム機を机の引き出しにしまい、広樹のゲームソフトを取り出していたのを思い出す。自分の物と間違えて保管していたかとも思い、引き出しを開ける。けれど予想に反して見当たらない。

「違ったか。でもなあ、俺がなんかしたような記憶があるし……」

部屋の中をくまなくさがすが見当たらない。

おかしいなと思い、部屋を出るとガタンと両親の寝室が開いた。

窓が開けっぱなしだったのを思い出し、閉めに行く。

「……」

廊下で何かを蹴った。何かが廊下の端でぶつかってとまる。

「あつた」

広樹のカートリッジだとわかり、ほっと一息つく。やはりあの時、昭利が抜いていたのだ。

どうしてここにあるのか不思議だが、見かけた恵美が拾ってそのままにして忘れていたのかもしれない。それよりも早速広樹に教えてあげようと階下の電話に走る。

「……」

受話器を取り、しばらく待つと広樹の母が出た。

「あの、すみません、中村昭利ですけど、広樹君いますか？」

『あら昭利君、こんにちは。えっと広樹？ うん、帰ってるよ。待っててね』

受話器の向こうで広樹を呼ぶ声がして、ぱたぱたと走る音がした。

『なんだい、昭利』

「あのさ、ゲーム機、俺の家にあつたわ」

『ああ、そうだっけ。忘れてた』

「すまん。今から届けるか？」

『いいよ。明日、持ってきてくれれば』

「悪いな。俺もちよっと今日は疲れてき……。明日香の奴がやたらバトミントンしようってさ……あはは」

言いかけて広樹が明日香を気にしていることを思い出し、言葉を飲む。彼が彼女を好きだとしたら、一緒に遅くまで遊んでいたことを告げたらどう思うのか？ デリカシーの無いこ

とを恥じた。

その一方で、もし広樹が彼女を好きだったら困る。広樹は大切な友達なのだから……。

『そうなんだ。うん』

「あ、ああ……」

思った以上にあっさりとした返答に肩透かしを食らった気分だった。

「なあ、広樹は明日香のことをさ、どう思ってるんだ？」

『え？ 沢森さんは可愛いと思うよ』

「それってやっぱり……」

肯定的な広樹の返答に昭利はいよいよ焦りだす。

『雄太が言ってるような意味じゃないよ』

「え」

だが、続く言葉が焦って熱くなった頭に冷水をぶっかける。

「あ、そう、そっか。ま、そうだよな」

肩透かしを食らったような昭利は肩から力が抜け、思わず受話器を落としそうになった。

『うん』

「はは、変なこと聞いて悪かったよ。じゃあ、明日ゲーム届けるからさ、すまん」

『んーん、こっちこそごめんね』

「？ ああ」

「一体何についてごめんなのかわからず、ゲームのことで怒られずに済んでほつとしていた。

昭利は一息ついてから受話器を置くと、自室に戻って鞆にゲーム機を入れる。明日は絶対に忘れまいと、しっかりメモまでして一緒に入れておいた。

「ふう、俺も母さん譲りのドジだもん……」

ぼんやりしながら窓を開けようとすると、鍵が開いていた。

「あれ？ 俺閉めたと思うんだけど……」

やはり親子で血は争えない。そう思ったところで父の姿が見えた……。

「母さん、開けっ放しだったよ」

「あら、ごめんなさい」

お風呂場から出た母に二階の窓のことを咎める。母は自分をげんこつでこつんと叩くと、舌を出していた。

若作りで通っている母だけれど、母にされるとたまにうざったく思う。特に友達の前ではやめてもらいたい。それを告げると悲しむのが面倒くさかった。

「はーあ、ったくも母さんはドジなんだから……」

「そういえば昭利、最近、明日香ちゃんとはどうなの？」

「え？ 別に明日香なんてどうも思っってないよ」

「そう？ ふーん……」

「なんだよ、母さん」

「うかうかしていると、他の子にもってかれちゃうかもよ？」

「な、誰があんなゴリラヒス女！ へ、明日香なんか好きになる奴の顔、見てみたいぜ」

「じゃあ、鏡でも見たら？」

「俺は別に！」

「うふふ。素直じゃないんだから……」

「母さん！」

真っ赤になりつつ背中をどんどん叩く。けれど母は意に返さず、ただケラケラ笑っていた……。

完